

7、鞆浦の災害

阿波志を始め古い記録で見ると、海部郡内の村里で最も人家の多いのは牟岐、続いては鞆浦である。鞆千軒という口碑があるほどここは古くから家屋の密集した部落であったが、藩政時代にできた棟附帳によってその戸数人口の推移をみると次の表のようになる。

年号	西暦	戸数	人口
明暦三	一五五七	三八七軒	一、五四六八
寛文十二	一六七二	三九一	一、六五四
享保九	一七二四	三七五	一、三九〇
寛政元	一七八九	二九一	一、〇九九

(一六五七) (一七二四)
 明暦から享保への七十年間に人口百六十人を減じ、さ

漁民の生活

らに享保から寛政への七十年間にはまた三百人減少している。他部落では時代とともに人口が多くなつていくのが普通であるのに、輛浦だけは、今日の過疎現象のようなことが幾百年の昔に現れていたのである。これは戸籍法に類する棟附の制度が生まれた明暦以後の記録であるが、さらに朔ればもっと古くから同じ現象が出ていたのかも知れず、輛千軒の口碑もあながち白髪三千丈のたぐいと捨て去れないように思う。

この過疎化の理由としてはいろいろ錯綜した素因もあるが、根本的な要因は、土地が余りにも狭隘で新開地が得られなかったことであり、次にひんびんたる災害の多発にあつたと考えられる。

古い記録がないので近世以降のものしかわからないが、主な災害だけでも次の通りかなりの数にのぼる。

年号	西暦	災害	摘	要
慶長	九一六〇四	大地震	輛浦北町の路傍にある高さ一丈・徑一・二丈の砂岩の連弁形輪廓内の銘、(大岩碑文)	「無無阿弥陀仏、敬白右意取者、人王白拾代御宇慶長九甲辰季十二月十六日未亥

寛文	二一六六二	大火	南町方面に大火	万照寺焼失
同	四一六六四	大火	輛浦全域に大火	二五九戸(六八%)焼失
同	五一六六五	大火	東町に大火	前年焼残った大半が焼失
宝永	四一七〇七	大津浪	近辺の浦々の被害甚大	大岩碑文(慶長碑に並べて左手にあり)
寛保	二一七四二	大火	火東町全焼	(多善寺記録)



刻於常月白風寒、凝行歩時分、大海三度鳴人々巨響、拱手処逆浪頓起、其高十丈、來七度、名大嵐也、刺男女沈下尋底白余人為後代言伝、奉與之、各平等利益者必也

藩政下の庶民の生活

宝暦	一三二七六三	大火	全町戸数の八十%焼失した物凄く大火	(年表秘録)
明和	三二七七六	火	輛浦立岩民家より出火、善称寺焼失	(同寺記録)
寛政	元一七八九	大地震	「西卯月十六日夜八ツ時大地震所々大いたみ積りがたし、海山川共に大ゆるぎ也、家蔵土手杯のいたみ夥しき事也、然れども夜分なれば諸国往来にて人に怪我は無之」(橋本龟吉方記録)	
寛政	四一七九二	大風	「七月廿六日朝八ツ時より大風吹き出し、翌八ツ時まで、高ませ吹き、それより西まぜに変わり、暮れあいまで吹きし也。此時那佐浦湊にて大小船八艘難破におよびし也。右の内奥浦島屋船・大木屋船・帶屋元兵衛船、右三艘は作事にも不懸ついにさばく也。外に泉州の船、是もついにみだれ仕舞ひし也。其外頼たるや船も段々いたみ作事のため船がかりする也。帶屋元次郎の船湊を流れ出で、ついに行方	
天保	八一八三七	大飢饉	知れぬ也。(中略)帯屋直右エ門船紀州加太の口にて難船の旨廿四日に飛脚来る。	(下略)(橋本家所蔵記録)

申上覚

安政 元	
一八五四	
大津波	
	<p style="text-align: right;">(九株十二人連記略)</p> <p>右者文化十四年当浦棟附御改被仰付候ニ付右之者共身居見懸人ニ被仰付候旨以見懸銀積被成候義候旨ヲ以当浦へ御立越え上此度身居見懸人三拾四人ニ被仰付候者共夫々取調被成候処左之者共天保八四年飢饉之砌家族共病死仕絶家仕候者又ハ居宅売払家無御座當時近親共方に加宿仕居申候者前頭之通夫々取調、書付を以申上候以上</p> <p>という書面が添付されている。</p> <p>嘉永十一年(安政と改元)十一月当地に大津波あり、輛浦水谷前の路傍に輛浦海嘯記の石碑がある。</p> <p>善称寺九代の住職祐深師の手記に、この頃数度の地震津波の状況が詳記されている。</p> <p>東光寺の堂宇倒壊。</p>

那佐港

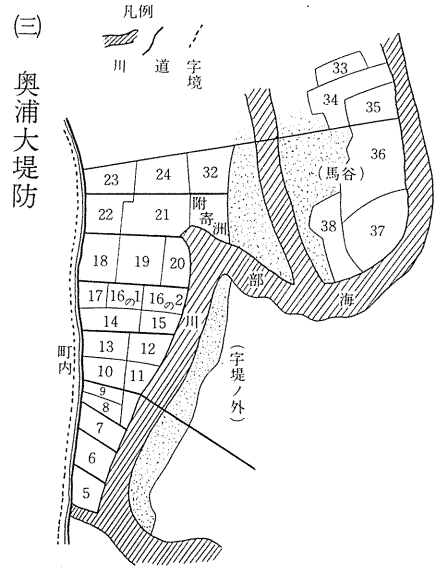


く入り易い港である。しかも湾岸に平地が乏しくて民家が少なく、脂粉の薫る料亭はおろか安直な一杯呑屋すらないが、湾が深く波はおだやかで船泊りには絶好の港である。

室町時代に入ると、海部川流域の特産である木材や薪炭が阪神方面に盛んに積出されるようになり、南方諸港の名が史上に現れ始めるのである。(一四四五) 文政二年の兵庫北関入船帳に見えている樽(長さ十二尺・巾六寸の板)を陸揚げした記録(69頁参照)にある海部という港名であるが、「中世阿波の港と畿内主要港」という絵図面によると、海部港は海部川の川口にあるので輛港を指している。ではなぜ輛港としないで海部としたか、海部というのは当

奥浦大堤防

阿波国海部郡奥浦村荒地免租年期願付属地図

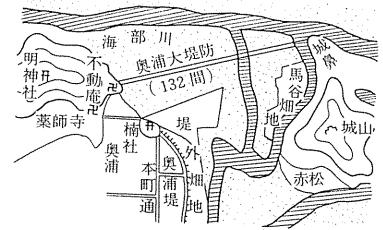


庄屋時代からの住民の悲願が戸長から村長にうけつがれてようやく実現し、保瀬ぎれの洪水に大きな渦紋を描いた奥浦大堤防の築造についてこゝで述べておく。

1、築堤以前の奥浦

奥浦大堤防は、薬師寺不動堂の下(現在里旅館の車庫)から城の鼻(東中学校裏山)にかけて築かれた堤防である。

この堤防ができる前の奥浦は、下の図のように本町通



の坪や妙見山にかき登って逃げ、町中も馬谷の畑地もたちまち荒廃する。その被害は年と共にもますますひどくなるばかりであった。

(二六八八―一七〇〇)

この水禍から逃れようとして元禄・宝永の頃町の東側に奥浦堤が築かれたが、さらに北側に堅固な堤防を設けて洪水の恐怖から解放されたいとは遠い昔から部落の人々のせつなる悲願であった。

2、大堤防構築の機熟す

長い藩政期に「土堤が必要なら自力でやれ」と無視さ

れてきた奥浦住民の願いが、明治になってようやくかなえられるメドがついてきた。

(一八八六)

明治十九年七月十日付をもって頼村外一村(奥村)の戸長となった野江村出身の岡川又五郎をはじめ、部落の先覚者たちが東奔西走してついに当局を動かし、県営事業として施工される機運を醸成したのである。同二十二年十月町村制施行と共に退任した岡川戸長の後をうけた初代頼奥村長小川清三・同助役佐藤熊太郎のとき、徳島県議会は、奥浦新堤の工事に県費補助三四一〇円を計上し、二十三年五月に起工し九月に完成させている。

延長一三二間・総工費四五七〇円、内一一六〇円が地元負担であった。

3、楠の神木

待望久しい築堤工事ではあるが、地元負担一一六〇円は、米価石当り八円九四銭(児島忠平氏調)に換算される当時としては巨額である。奥浦の人々は幾度も寄合いを開いてその捻出に智恵をしばった結果、楠神社の楠を売却することにした。この社には大昔から楠の大木があったので預章(楠)社といわれ、文化年間に書かれた阿波志にも「預章大なる者圍一丈、次なる者七尺、タブ圍一丈、一丈二尺

りの北端が楠神社でその下を海部川が流れていた。正保・寛保の頃から本町通り附近にも

一一四四

の者一株」と見えている。その後九十年の樹齢を加えてさらに巨大になったこれらの神木を売却して、地元負担金を賄うことができたのである。境内の治水記念碑に、
「今ヲ距ル凡ソ四拾年前此所ニ巨大ナル楠樹アリ樹下ノ祠ニ水象女命ヲ祭り楠社ト称ス然ルニ海部河水樹幹ヲ洗ヒ東南ニ分流シ洪水年々重ネ家屋ノ被害甚大ナリ時ノ戸長岡川又五郎氏夙ニ交通治水ニ力メ有志者ト俱ニ東奔西走遂ニ政府ノ意圖ヲ促進シ未曾有ノ新堤防築成ニ至レルモ村費多端境内ノ楠樹ハ以テ莫大ノ補助金ト成リ永遠治水ノ基礎ヲ固ム爾来長星霜社殿荒廢シタルニ依リ茲ニ村民ト図リ社殿ヲ改築シ記念碑ヲ建設シテ永久崇敬ノ寔ヲ至スモノ也
大正十二年二月 世話人 文明舎 久松松嶺書」

このようにして奥浦の町は、楠神社の楠のおかげで永久に海部川の本流から直撃の被害を蒙ることがなくなつたのである。

4、対岸からの横やり

かねてからこの堤防ができれば左岸への影響甚大として反対していた大里・四方原の人々は、工事執行のため現場に来た県官に工事の取止めを要請したが、県土木課

庄屋から戸長へ

奥浦大堤防

長は「この工事は海部川全体のために実施するので、川東村は殊にその恩恵をうける地域である。」として一顧だにできなかった。ところが大堤防が完成した年の秋、大雨が続き海部川が氾濫して川東・川西村で浸水家屋一七五戸・冠水田畠二五六町五反三畝という被害が出た。川東村民は、これを新堤築造の所為としてその撤去方を幾度となく知事にせまった。時の関知事もやむなく十一月の臨時県会に同堤撤去の議案を提出したが、県会は「不合理」として否決してしまつた。

そこで、翌二十二年十二月二十七日に四方原の有志十八名の連署を以て内務大臣品川弥二郎宛の請願書を提出している。その文面には「新堤は小利大害の毒物なり」とか、「このまゝでは川東村民は必ず、飢餓凍餓に陥るの惨状遠からざるべし」とか、「徳島県下に海部郡あるは恰も日本国に沖繩県あるが如し」など激越な名文句を縷々並べ、関知事へ「果断の決行をなすべし」様御訓令を仰ぎ度し、地に伏て請願す一同再拝頓首（那佐浜家所蔵文書）と結んでいる。まことに古人の意気や壯、稚氣また愛すべき請願書であるが、添付の美しく着色した地図がまた愉快である。新堤の方向をやみくもに北へ捻じ向け、あたかも海部川を堰止めて大ダム建

設のための堤であるかのような描き方をしている。

このような請願や陳情が強引に繰返されているさ中に、天が最後の審判を下すように勃発したのが明治二十五年七月二十五日の保瀬の大崩壊であつた。

5、保瀬ぎれの荒廃

二十日頃から降り続いた豪雨で海部川は増水し、当時の不完全な堤防が危険に傾しているとき、川上からさらに恐るべき連絡がはいつた。それは、二十五日午前十時頃川上村大字平井の保瀬の右岸山上が巾三町・延長六町に亘つて大崩壊して海部川の水を堰きとめ、洪水は逆流して寒が瀬一帯は濁流に没し、四戸埋没・八戸流失・死者四十七名に及び、上流一里半の櫻谷部落の大杉の梢が水にかくれ、さらに上流の轟神社の扁額が半分水に浸るほどである。この水がいつ下流に大氾濫を来すかも知れない。嚴重に警戒せよというのである。驚いた沿岸各村落では、女子どもや重要な家財を安全な場所へ退避させ、村中総出で堤防に土俵や古畳を積上げて補強し、鉄砲持ちに緊急合図用の空砲をもたせて見張りに立て厳しい警戒体制を布いた。

やがて、巨大な自然ダムの水圧は崩壊壁の一角を突破不幸中の幸いというか、災害を予期して警戒していたため郷土には、崩壊現場で遭難した大井の一名を除いて人死もなくまた家屋の流失もなかった。しかし堤防の崩壊・耕地の荒廃は惨状目をおおむねばかりで、中央でも特に東園侍従を派遣して災害地を視察・慰問させた。侍従一行は、大井の富田家で一泊の後、当地方と時を同じうして発生した木頭村大戸の高磯山崩壊現場へ向われたということである。

6、幻の大堤防

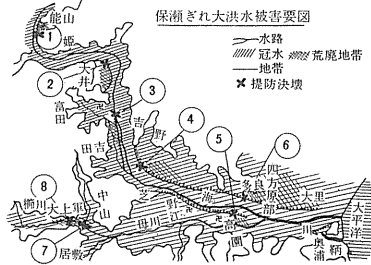
川東村民は、この災害をすべて奥浦新堤の所為であるとし、筵旗を押立て、海部川原に集結し、村会議員の一部は復旧工事現場の軌道の上に坐りこむなど新堤撤去の実力行動も辞せずとの気構えをみせてきた。

かくして、保瀬ちえの大洪水に壊れなかつた奥浦新堤も、この筵旗のデモに潰え、現在の御大典記念碑のあるあたりまでを残してその東側の専売公社から中学校々舎東端へかけての新堤は取払われ、出水時には馬谷の方に向つて水が越えて流れる低い石だたみ（水越しという）としたのである。

奥浦の住民の幾十年にわたる悲願がむすびようやくに

庄屋から戸長へ

屋根の上に人が乗って助けを求めながら流れていくのを見た。「高園の民家の軒下一尺まで水がきた。納屋に避難してあつた馬の平首が水につかつた。」「大井の深田が土砂に埋まって高田になつた。」「芝の森の東のタブの木の下の石地蔵が多良へ流された。」「松木谷でも家三軒だけ残して後は皆水につかつた。」などいろいろなあ



を与えた。この大洪水のすさまじさを伝える古老の話を列挙すると、「鉄砲が鳴り絶叫が聞え、川上から赤濁りの水の巨大な壁が大地をゆるがせて迫ってきた。」「富田の善福寺の座の上一尺も水につかつた。」「草葺の

庶民と医療

して構築されたこの大堤防は、命運わずか二年、**幻の堤**とも呼ぶべきはかない存在であったが、その一部が残されたことはせめてもの幸いであった。奥浦の町は、少なくとも海部川洪水の直撃だけは、その後まぬがれ里、泉、大野を初め多くの人家が建ち並ぶようになったのであるから。

それにしても、**現在幻の堤**のあとの**水越し**の上には昔にまさる大堤防が長々と横たわり、曾て**筵旗**のはためいた海部川原には、当時の張りつめた世相もけわしい人の心もうたかたと共に消え去って、清らかな水の流れが静かにせせらぎの音をたてているだけである。

る。特に郷分には医師も少なく、また医師の治療を受ける余裕のない庶民層の生活は実に悲惨なものであったと想像される。

郷土の医師

本町内で、医師としての最も古い記録は、(二六五八)明暦四年の「**靱浦棟附人改帳**」に、

「一、**沓家**

医師 幸庵

歳五拾五

沓人

幸庵子寿庵

同式拾沓

高八斗七升

一、**沓家**

医師 大兵衛

歳六拾

加子本役源五兵衛屋敷

(4) 宝暦四年大洪水の事

宝暦四甲戌年八月廿八日洪水廿七日より雨降廿八日昼四ツ時
俄に大水川底より水上ル事壱丈八九尺、姫、能山、大井、吉
野、高園と人家多流、高園村人貳拾人余浦死吉野村よりも人
三四人家ニ乗流村々牛馬多流死 奥流谷堤も越水入二階より
船に乗 昼の事故人不死 郷中舟遣 能山姫村大井富田吉田
吉野芝野江高園村右村々の内高園村商人家流 正保四年洪水
に田地家多流由申伝たり其砌奥浦二階より船乗り相助と言伝
我が家座の上水壱尺五寸乗 正保四年洪水宝暦四年洪水同断
なり 村々の堤多切田多相損

(5) 上下灘歴代代官 (原文敬称付)

下灘御代官

石川甚右エ門 稲田次郎五郎 本庄九郎右エ門

荒木勝左エ門 笹田徳兵衛 稲田喜三兵衛

川端孫兵衛 本庄重郎右エ門 西 弥次郎

石田彭之丞 前瀬新左エ門 山崎万兵衛